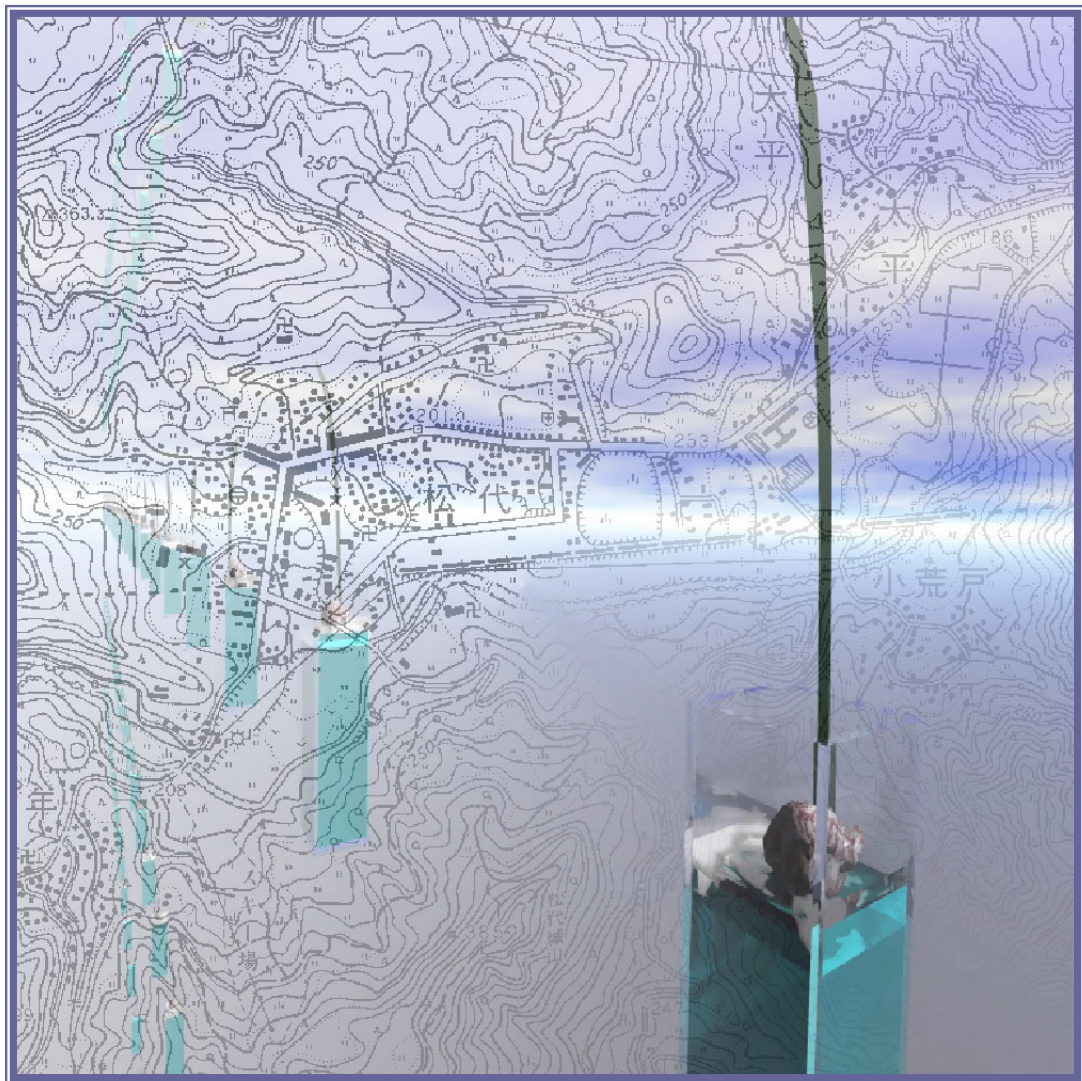


「くむ・めぐる・いとなむ」制作ノート

2003 年「第 2 回大地の芸術祭」参加作品



第 2 回大地の芸術祭

会 期:2003 年 7 月 20 日(日)~9 月 7 日(日)

この作品の設置場所:雪国農耕文化村センター(新潟県東頸城郡松代町)

牛 島 達 治

2002/08/24

改 04/10/10

は じ め に

妻有に、何度か出かけて行った時、自分を取り巻いている環境との差異を「距離」に換算して行く事を意識してきた。「距離」と言っても地勢上の距離ではない。歴史的、身体的、環境的など哲学的な距離である。これらを考察して行く事で、一枚の仮想地図上に、自分を現す点と妻有を現す点を描き記すことが出来ると思ったからである。また、この測量的試みは、一つの点を書きしるす事が出来たとしても、それは、帰結点ではない。妻有を思い続ける限り永々と続くはずであり、この様な測量こそプロジェクトの本質だと思っている。

2000 年の「第1回大地の芸術祭」においては、「観測所」という作品を松代町の棚田の風景の中に設置させていただいた。この作品は、私にとって文字どおり観測所である。この地との関わりの始めに、妻有の棚田の中に、物理的な自分のための点を置いてみた。ここから色々な事物に思いを馳せるわけである。



観測所 2000 年夏（第1回大地の芸術祭）

初めに見えた事、「妻有の自然環境の四季のうつろいと、その中での人々の暮らし」。

そして私は、何度も妻有での見聞を思い返す。

その中でもう一度見えてきたこと、「人々の農業的なイトナミ＝文明と、激しくうつろう自然の四季を通じたイトナミ」。色々な記憶の中のシーンは、通底音のごとくここに行き着いてしまう。これは、初めに見えた事と同じ帰結だ。これら文明や自然は、別々の項として対峙しているのではなく、すべてを含めて「ヒトツノイトナミ」であり続けてきた事に今更ながら気づかされる。

「文明対自然」なのか「自然の中の一部としての文明」なのかという事に対する問いかけ。

私の日常環境(都市的生活)では、望もうと望むまいと、自然に対峙するかたちで人々が働いているという構図が出来上がっている。これは、何も都市に限定された事ではないのだが「生産し続けることが未来である」という暗黙のスローガンが掲げられた中で生活しているかの様だ。しかし、この時代、環境の事や心の事が注視せざるをえない事も多くなってきた。本能的な制御作用のあらわれなのだろうが、こんな事をも商業的に価値を持たせてしまうのもまた文明の賜物だと言える。

誰もが、訪問者としての立場で妻有を見たときは、美しく保たれた棚田の風景が不変である事を望む。そして、訪問によってこの地に触れたとき、風景を保つ事の大変さやここでの生活の事を見聞きするようになる。そこには、またまた自明であるところの理想と現実の乖離がある。ここに大きく横たえている問題をどう解釈して行くかという事、どう解決を目指すかという所が妻有に於ける「大設問」だろう。これから未来、ますます生活の地域による差異は無くなって来る中、妻有はどこに行くのか。私の測量は続く。

ア ウ ト ラ イ ン

環境： ほぼ線松代駅南側に建設される雪国農耕文化村センター内の2階のインフォメーションブース、アートグッズショップ、フラワーショップの機能を備えた楔形の空間。

概要： 植物を栽培するシステムとグッズショップの商品の陳列設備として機能しながらその複合的と機能空間内をさまよう装置群からなる。前者は水の物理的な輪廻の視覚化装置とその水を使った植物の育成という最低限の生物的サイクルを人工的に再現する装置群である。また、概念後者は、文字通り商業活動に寄与すべく働く装置群である。両者の間には、何の関連性も無いように思えるかもしれない。しかし、これらは特別でないよくある風景、社会の切片に他ならないと考える。人のつくりあげた文化の中には、いろんな物事がいろんなサイクルで、重層的に存在する。音の波が干渉し合う時うなりが生じるように、引き合って輝いたり、打ち消しあって透明に成ったりする。またこれらは、観察者の視点によっても様相が変わる。このような脈略のない相互干渉が、文化であり、社会的な強度を裏打ちして行くものだと考える。

構造： おもな要素とその働きは、以下のようになっている。

【植物栽培装置】 種蒔き・育苗・栽培を補助し、その過程をディスプレイする装置群。

【水の供給装置】 植物栽培装置に使う水をアクアユニットに補給する装置。その過程の中で水の三態を視覚的に見せる。

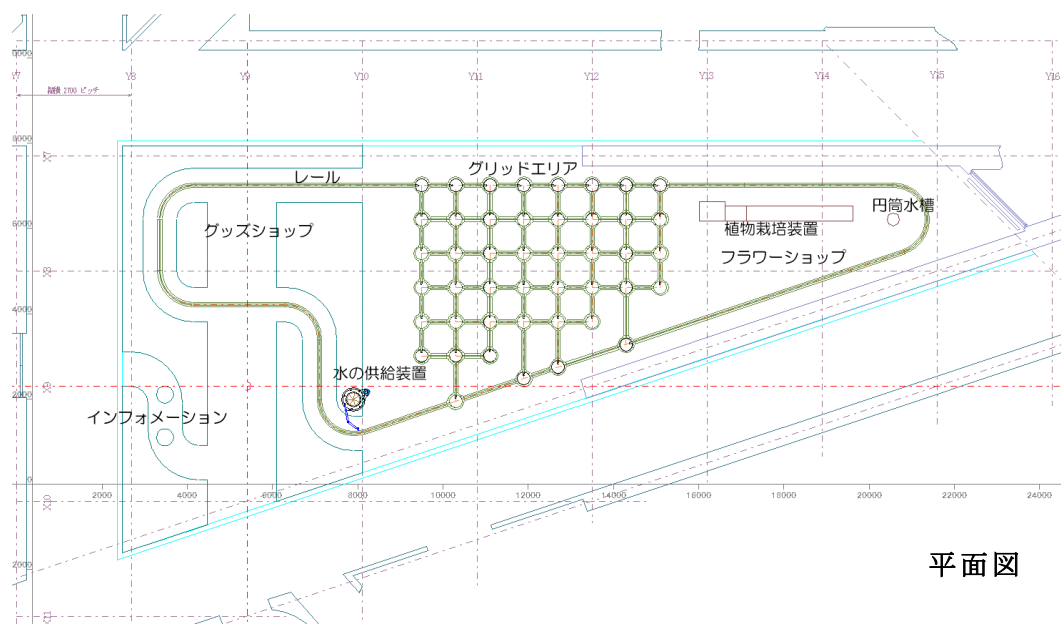
【アクアユニット】 レール外周上を伝って水を運んで行くモノレールのような走行装置。2～3台ほどを予定。

【トランスファーユニット】 アクアユニットと同じレール上を走行し、グッズショップの商品をディスプレイする機能を持った移動棚。24台を予定。

【レール】 アクアユニット、トランスファーユニットが走行する軌道。各ユニットは、上から見て時計回りに進行する。

【グリッドテーブル】 グリッドエリアには、トランスファーユニットだけがレール外周より進入する。トランスファーユニットのその時々相互の位置関係に応じて進行方向を変えたり、動き始めるタイミングを調整したりという制御機能がある。

- これらの仕掛けが、空間いっぱいに展開する。ショップやインフォに訪れた人たちは、この空間に共生する装置群の中に風景として取り込まれ観賞されながら自らも鑑賞する。



平面図

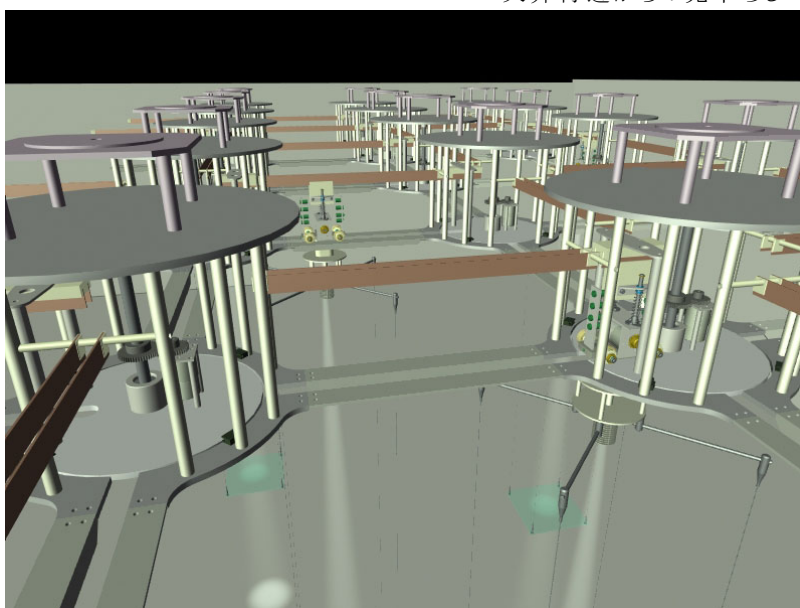
各部の説明

◎ グリッドエリア（グリッドテーブル群）

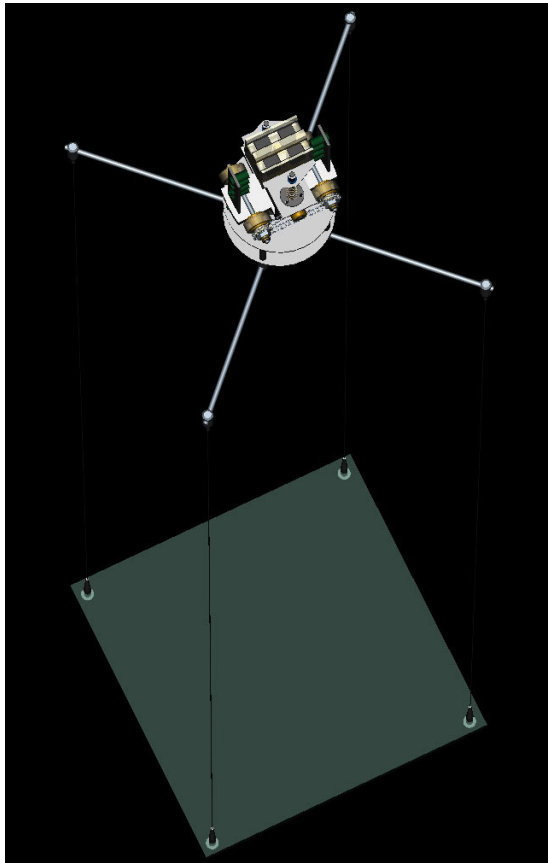
天井より吊り下げられたメカ(グリッドテーブル)群。個々のメカによって、トランスファーユニットの進行方向や進行タイミングが制御される。このエリア内で、複数のトランスファーユニットが、うろうろと不規則にグリッド間を移動し、エリアの端から循環レールへと排出されてゆく。



グリッドテーブルとトランスファーユニット イメージ
天井付近からの見下ろし



◎ トランスファーユニットとアクアユニット



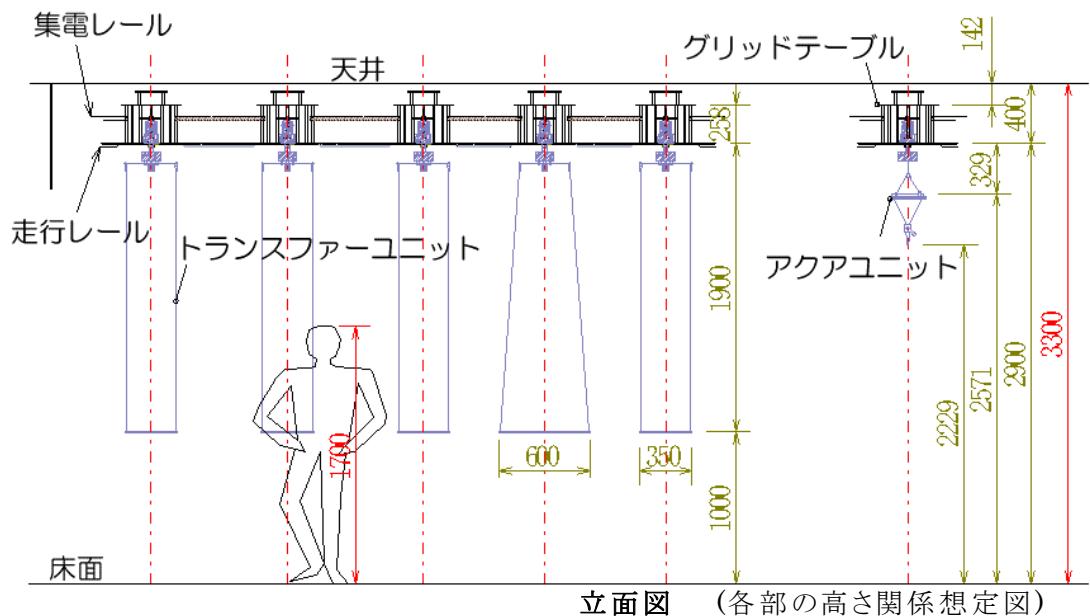
トランスファーユニット

レール、グリッド上を走行するメカ。
下部に棚やハンガーなどの什器部品を吊り下げてあり、様々な商品と共に永永と展示空間を移動する。



アクアユニット

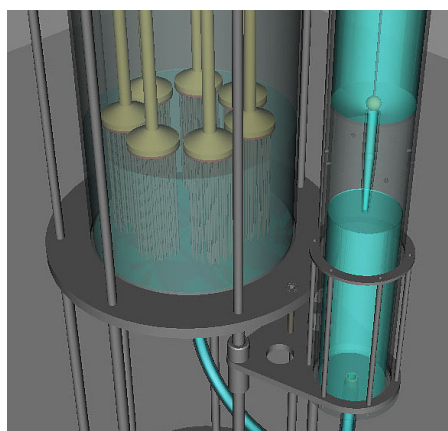
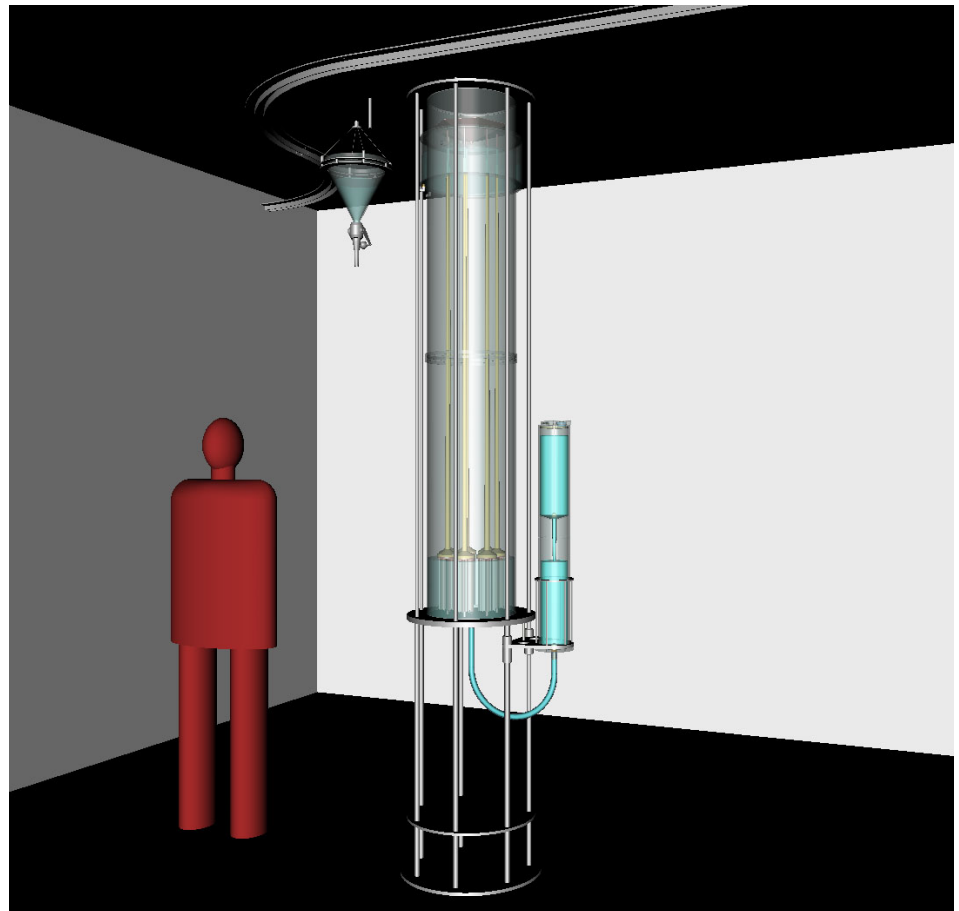
レール外周上を走行し、水の供給装置から植物栽培装置まで水を運ぶメカ。



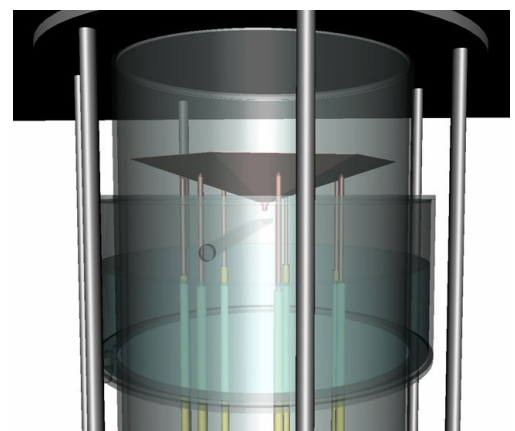
◎ 水の供給装置

植物栽培に使う水を運ぶアクアユニットに補給する装置。

アクリルのチューブを中心とした円柱状の構造。熱交換器の作用により円柱上部空間の熱を奪い、円柱底部の水を温める。その結果水蒸気となった水が上方の結露皿を経て上部タンクに集められる。アクアユニットが所定の位置に巡って来ると、上部タンクより給水アームによって給水する。



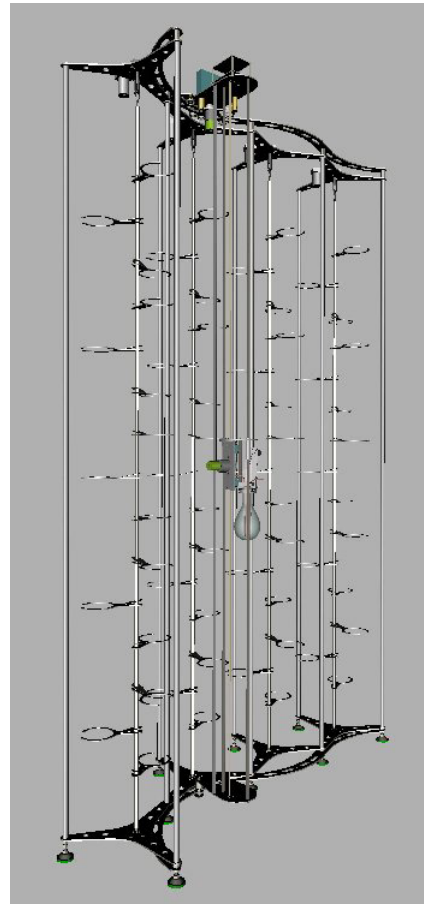
ケース下部の熱交換器
(水に浸かっている7つのユニット)
※右側は、水のリザーブタンク



ケース上部の上部水タンク(リング形状)と結露皿
※結露皿と7本の支柱連結部付近に氷結が発生する見込み

◎ 植物栽培装置

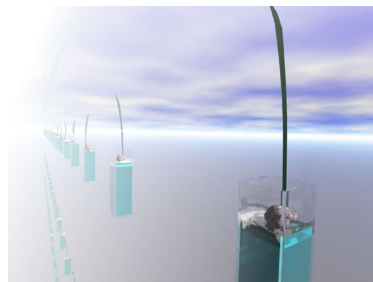
このシステム(作品)の中で最も重要であり、実際に「いとなむ」ということを探り続けるため「教場的な場」となる装置。アクアユニットによって運ばれて来た水を使い、田の雑草等の栽培・ケアをする。



断片的イメージとある見聞

I いつか見た夢

無機的な環境とシステムによって生産(育むといった温かい意味合いではなく)される植物群の風景的イメージ。とても静かである。情緒的な事柄が一切存在しえない中ですら生産され続ける生命。



II 場のこと

人は、「場」を失いつつあるのか。よくある近未来風景イメージと同じように、人は、大地から離れ、やがて精神的な拠りどころとしての「場」からも遊離していつてしまうのだろうか。

誰にも確かなことはわからない。

また、「現実的には、精神的な場を持ち得ない人たちが始めている」という観方は、大きな歴史の流れの中で考えると卑近過ぎるのだろうか。

目を細めて遠くを見据えようとするかのような思いの中で、私には判断のしようがない。

III 夢に似てないこともないといえなくもない

2002/4月に松代町にある「松代ハイテクファーム」を訪問した。人工的な環境による新しい農業の実験場(商業的に広まっている方法であるので実験とは言えないのかもしれないが、農業に対する概念がどう変革して行くのか考えさせられると言う意味合いに於いて、人口環境を利用した農業生産は、実験的であると思える。すなわち、意味の実験、受動的な実験。)だ。



最初にこの話を聞いたとき、この土と水の豊かな土地で人工的な環境での野菜作りとは、なんとも不思議な気がした。建物は、廃校となった学校の校舎を利用したようで質素な印象を受けた。しかし、中に入ってみると、外観から受けた印象とは違っていた。内部は、空間いっぱいといった大きさの強化プラスチック製のタンクのような無菌室であり、制御された人工太陽(照明)のもと24時間管理された水耕栽培システムそのものである。3~4人ほどでの作業は、工業的な生産に似ていた。生育設備の規模と生産能力は、見事にバランスをされていて、生産されたリーフレタスの供給量も計画された量ぴったりであるため供給先も定まっているようで、それはそれでまた苦労もあるという話を伺った。農業的なことがここまでコンスタントにとりおこなわれている事に驚きを感じる。それと、このコンスタントな生育装置を稼働させてゆくことに対する情熱は、やはりこの場所の気候的な特徴である豪雪地帯であるという事実無くして持ち得なかったのではないだろうかと思う。生産者の物理的にも精神的にも重要である「妻有という場所」で少しでも安定した生産体制が農業の中で確立できればと言う願いがあるのではないだろうか。一見して、「コンスタント=都市的安定」と言う図式を思ったが、それだけでは無いという事は、なんとなく感じる事が出来た。余談だが、照明照射時間が一日で数分違うだけで、成長の仕方が大きく標準からずれてしまうという話もお聞きした。それから、一定の割合で一つだけ大きくなってしまふ株も必ず発生するという話も伺ったが、リーフレタスのささやかな反抗なのか。リーフレタスの気持ちになってみるとわかるような気もするが、実社会の様であり、ちょっと怖い。

・作業の様子 栽培室は、栽培灯の黄色い色に包まれている。



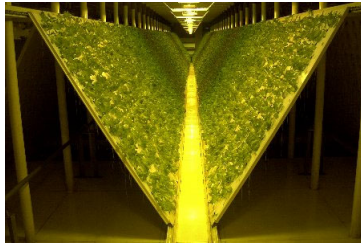
種子を1つずつパレットに並べている



発芽させてから数日をパレットで過ごす



栽培パネルに移植
畳ほどの大きさがひとつの単位となる



昼の列

栽培室に写真のような列が数列あり、各列端から毎日出荷されると、パネルは手動でUの字形をたどるように押して行き、他端に出来た空きに新たなパネルが加わる



夜の列 真っ暗なわけではない



左右のパネルで2週間ほどの差がある



回転するパイプの所々に付けられたノズルから栽培溶液を、根に霧状の散布する



パネルの裏側
穴から髭のように根が伸びていて、絶えず溶液の散布を受けている



人工太陽
消灯中 メタルハライドランプ?

以上が、ハイテクファームでの見聞である。

「いつか見た夢」を現実世界で目の当たりにしたよう思ったが、違っていた。確かに今までの農業とは、だいぶ違った様相を呈していたが、無機的な風景ではなかった。あたりまえと言えばあたりまえだが、「地に根ざす」ということなのだろう。



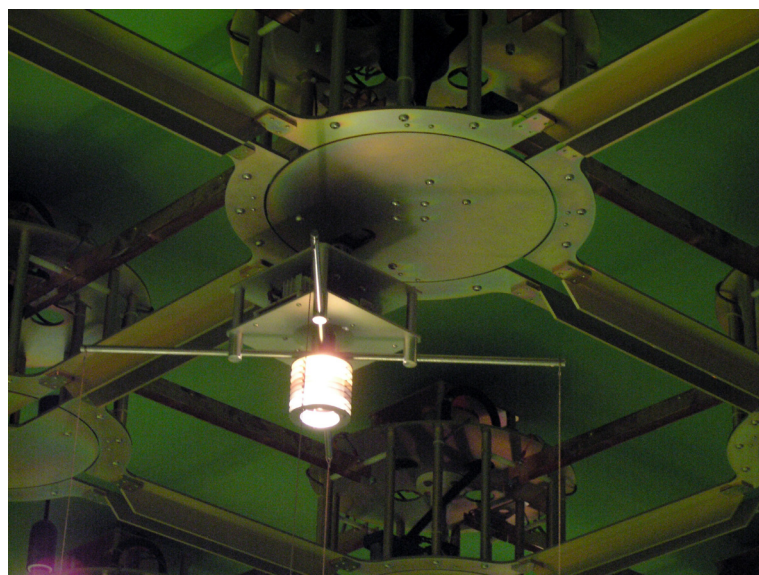
matsudai_01



matsudai_02



matsudai_03



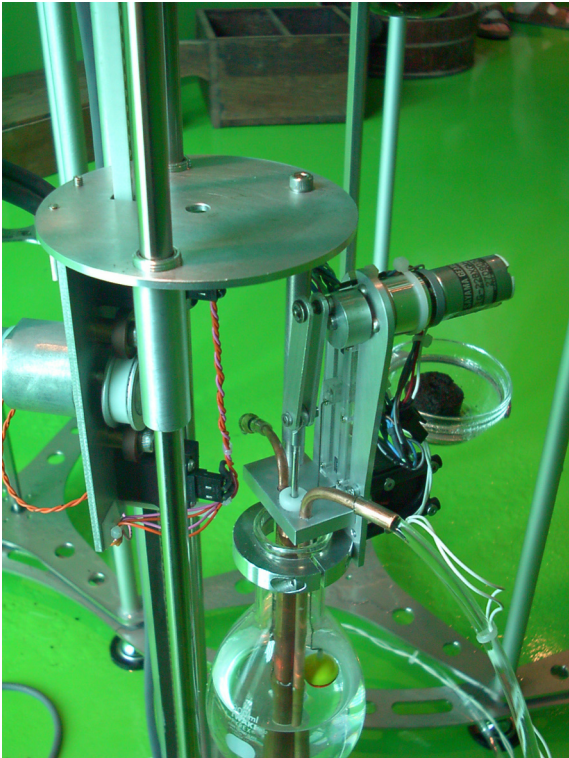
matsudai_04



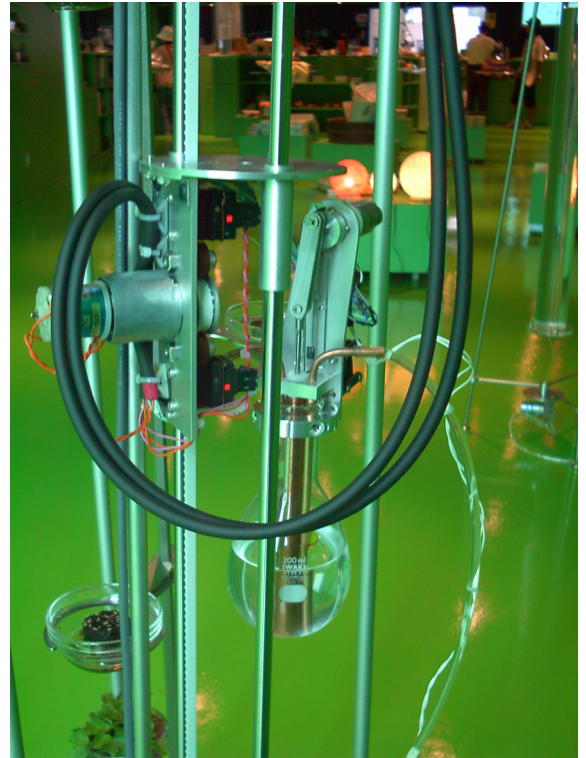
matsudai_09



matsudai_10



matsudai_05



matsudai_06



matsudai_07



matsudai_08